

# 30pmL-007

モルヒネの血中濃度推移に及ぼす消化管傷害の影響

○原 裕一<sup>1</sup>, 橋下 緑<sup>1</sup>, 菊口 稔乃里<sup>1</sup>, 杉野 雅浩<sup>1</sup>, 田中 亨<sup>1</sup>, 細谷 治<sup>1</sup>,  
從二 和彦<sup>1</sup>(<sup>1</sup>城西大薬)

【目的】がん性疼痛に対する薬物治療は WHO の定める 3 段階除痛ラダーに従って行われ、多くの場合オピオイドとともに非ステロイド性抗炎症薬 (NSAIDs) が併用される。ここで NSAIDs に起因する消化管傷害により、粘膜のバリア能が低下し、オピオイドの吸収性が変化する可能性が危惧されるが、詳細は明らかにはなっていない。本研究では胃及び小腸に潰瘍を惹起させたラットにモルヒネを経口投与した後の血中濃度推移の変化を調べることを目的とした。

【方法】外部に露出させたラットの胃に氷酢酸を接触させ、酢酸胃漿膜適用潰瘍モデルを作成した。また、インドメタシンを 24 時間間隔で 2 回、ラットの背部に皮下注射し、インドメタシン起因性小腸潰瘍モデルを作成した。各モデル作成後それぞれ 5 または、1 日後にモルヒネ塩酸塩を経口投与し、頸静脈より経時的に採血を行った。血漿中モルヒネ濃度を LC-MS/MS を用いて測定した。

【結果・考察】酢酸胃漿膜適用潰瘍処置群の血中モルヒネ濃度推移は、コントロール群と比較して  $T_{max}$  が減少し、インドメタシン処置群での血中モルヒネ濃度推移においては、コントロール群と比較して  $AUC$  が上昇傾向を示した。胃および小腸の傷害部位がモルヒネ吸収の増大に影響していることが示唆された。本結果は消化管傷害時のオピオイド投与に有用な情報を与えると思われる。